

看護臨地実習準備教材の設計と開発 —臨地実習場面・状況を模した学習活動の創出—

Design of Learning Materials for Preparing Nursing Clinical Practicum:
Creation of Learning for Nursing Clinical Practicum

三宮 有里^{*1*2}, 中野 裕司^{*1}, 鈴木 克明^{*1}, 平岡 齊士^{*1}
Yuri SANNOMIYA^{*1*2}, Hiroshi NAKANO^{*1}, Katsuaki SUZUKI^{*1}, Naoshi HIRAOKA^{*1}

^{*1}熊本大学 教授システム学研究センター

^{*1} Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2}順天堂大学 医療看護学部

^{*2} Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

＜あらまし＞本研究の目的は、看護基礎教育における学生の臨地実習学習レディネスを高めることを意図した独学用実習前準備教材を、GOLD メソッドを適用して設計・開発することである。A 大学の「実習 B」を対象に課題分析をして教材を設計・開発した後、本教材の妥当性を評価するために、専門家レビュー、形成的評価を行った。本稿では小集団評価の結果を中心に述べる。小集団評価の結果、事後テストでは事前テストに比べ「できた」項目が増え、学習後の臨時実習自己効力感尺度得点は、学習前の得点に比べ有意に高かった。これらの結果から、本教材は臨地実習に対する学習レディネスを高められることが示唆された。

＜キーワード＞ 看護基礎教育、臨地実習、GOLD メソッド、教材設計、形成的評価

1. 問題と目的

看護基礎教育における臨地実習は、学内学習で習得した知識や技術を実践の場で応用することにより、看護実践能力、人間関係形成能力、臨床判断や問題解決能力を高めること、さらには看護専門職の役割や責務への理解を深めることを可能にすると考えられており（厚生労働省 2011）、重要な位置づけを担っている。しかし、「学内で学習してきたにも関わらず、実習でその知識や技術を上手く活用できていない」という現象が日常的に報告されている。このような現状から、効果的な臨地実習の充実や改善は喫緊の課題であり、臨地実習前に臨地実習に向けた学習レディネスを高めておくことが求められているといえる。そこで、学内学習の出口と臨地実習の入口のジョイントとなる部分を作る、またはその部分の学習を支援することを通じて、学内学習と臨地実習をシームレスにつなぐことが重要であると考えた。

本研究では、学生の臨地実習学習レディネスを高めることを意図して作成した実習前準備教材を設計・開発することを目的とした。

2. 方法

2.1 教材の設計

A 大学の「実習 B」を対象に、実習準備学習教材の課題分析をした。分析結果を踏まえ、仮教材を作成した。仮教材を活用した予備調査で明らか

になった問題を解決するために、池上（2016）が開発したゴール達成型デザイン（Goal-Oriented Learning Design Method：以下、GOLD メソッドとする）を適用した。

GOLD メソッドとは、エキスパートの医療・看護行為を 5 段階と 3 種類の活動に形式化することにより、初心者がエキスパートの能力を効果的・効率的・魅力的に学習できる教育をデザインする手法である（池上 2016）。

GOLD メソッドのデザイン方法に則り、まず学生が臨地実習でよく遭遇する場面に焦点を当て、①準備、②訪室、③実践、④報告・記録、⑤振り返りの軸と「観察する・整理する」「判断する・選択する」「行動する」という活動の軸からなるスクリプトを作成した。これは、臨地実習で既習内容を活かして、知識や技術を習得するために必要な行動を具体的に書き表している。仮教材をスクリプトに沿って再構成し、GOLD メソッドの学習ツール（患者カード、技術カード、技術実践カード、患者信号機など）を入れた独学用教材を設計し（図 1）、Moodle 上に開発した。その後、教材の妥当性を確認するために、形成的評価（一対一評価）、専門家レビュー（GOLD メソッドの開発者、ID 専門家、内容領域専門家のレビュー）、小集団評価を実施した。以下、小集団評価の方法と結果を述べる。

2.2 小集団評価

本小集団評価への協力の同意が得られた A 大学看護学部学生 10 名を対象とし、本教材の学習進捗状況を把握した。また、学習前後のテスト結果と、学習開始時、終了時の 2 時点で無記名自記式質問票を配付して回答が得られた結果を用いた。質問票は、真鍋ら（2007）の臨地実習自己効力感尺度 16 項目（6 件法）、研究者が独自で作成した教材に対する満足度を確認する 10 項目（5 件法）から構成した。これらの調査項目を学習前後で比較検討した。

3. 結果

3.1 学習進捗状況

対象者 10 名全員が教材内にあるすべての学習を修了した。全員が各章に設定されているタスクを実施していた。また、練習問題を正解するまで繰り返し回答していた。

3.2 事前テストと事後テスト

各テスト後にチェックリスト 19 項目を用いて、実施した項目ができたか、できなかつたかを自己評価で確認した。その結果、学習前は「できた」と回答した者はいなかつたのと比較して、学習後は 19 項目中 17 項目で「できた」と回答した者が多かった。

3.3 臨地実習自己効力感

学習前と学習後で、臨時実習自己効力感尺度得点の変化を確認した結果、学習前の総得点の平均は 59.1、学習後の総得点の平均は 69.7 であり、学習前に比べ高かった ($p<.05$)。また、学習前後の各項目の得点の変化を確認した結果、16 項目中 10 項目は学習前と比較して高くなっていた ($p<.05$)。学習前と比較し特に得点が高くなつた項目は、「優先度を考慮して患者に援助すること」、「患者の症状や状態を観察し、症状の変化に気づくこと」であった。

3.4 教材に対する満足度

対象者 10 名の満足度を確認した結果、10 項目中 9 項目は、「とてもそう思う」から「ややそう思う」と回答していた。「とてもそう思う」と回答した者が多かった項目は、「この教材はやりがいがあった」と「この教材の続編があれば継続して学習したい」であった。

4. 考察

3.1、3.2 の結果や「実際に実習で学ばせてもら

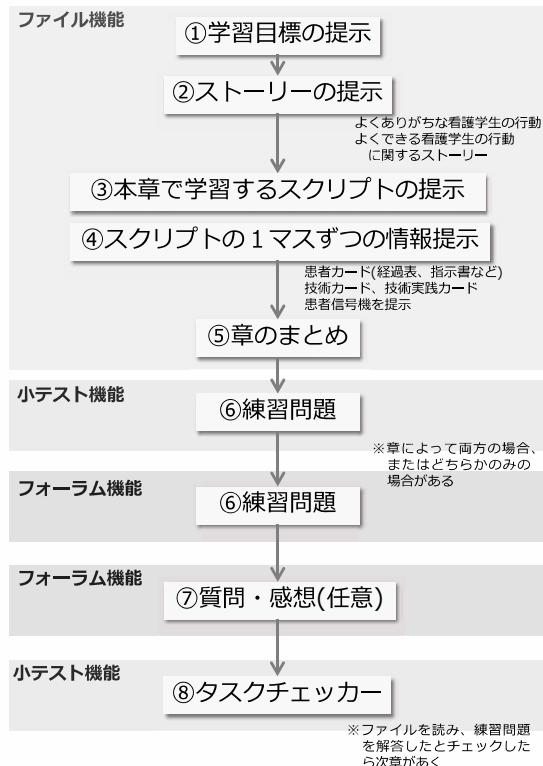


図 1 教材の各章の構造

っているのに近いかたちで学習することができた感じがします。」といった意見から、臨地実習での学習と同じような課題現出・解決プロセスと同じような教材の構造や情報提示ができていたこと、難易度や内容はある程度妥当であったと考えられた。また、学習前に比べ学習後は臨地実習自己効力感尺度得点が有意に高かつたことから、本教材を通じて対象者は臨地実習をすることに対し遂行可能感を得られたことが考えられた。本教材で学習することによって、臨地実習に対する学習レディネスが高められることが示唆された。

今後の課題として、全員が「できた」と回答した項目が少なかつたことから、教材内容や練習問題を改善することが挙げられた。また、本実習のみならず、他の実習において本設計の適用可能性を検討することが必要であると考える。

付記：本研究は、熊本大学大学院社会文化科学研究科に筆頭著者が共著者の指導の下で提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

参考文献

- 池上敬一（2016）.医療シミュレーションと教育工学(第4章) .中山実,鈴木克明（編著）職業人教育と教育工学,ミネルヴァ書房 : 63-87
- 厚生労働省（2011）.看護教育の内容と方法に関する検討会報告 : 2-4
- 真鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり他（2007）.看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討,日本看護研究学会雑誌.30(2) : 43-53